

研究プロジェクト

進化と文化とこころ：生物的視点と社会的視点からこころを探る

平石 界（こころの未来研究センター助教）

■目的

古来「人間とは何か」そして「人間のこころとは何か」という問いを追求する営みは、宗教、哲学、文学、政治学、経済学、社会学、心理学、人類学、そして生物学や脳神経科学など、多層的に厚みをもって行われてきた。本研究プロジェクトは、特に「進化」と「文化」という切り口から迫るアプローチを取り上げ、それぞれのアプローチを専門とする研究者間の交流とコミュニケーションを促進することを目的としている。

■プロジェクトの第一の軸：共同講義

本研究プロジェクトは3つの軸によって推進されている。第一の軸は、メンバーらによる共同講義である。2010年度は、京都大学の全学共通科目である「こころの科学入門Ⅰ」で、メンバーの平石と内田に吉川左紀子こころの未来研究センター長を加えた3名で、「理論」「感情」「他者理解」「対人関係と自己」「言語」という共通テーマにたいして、進化心理学、文化心理学、認知心理学の立場から講義を行い、さらに講師と受講生によるディスカッションを行った。

また、より専門的な内容を扱う講義として、総合人間学部の学部特殊講義「こころの科学」も開講した。夏学期は「進化」、冬学期は「文化」を中心テーマに、プロジェクトメンバー全員が参加して講義とディスカッションを行った。2010年度冬学期は、こころの未来研究センター客員准教授であるベス・モーリング氏（米国デラウェア大学・文化心理学）にも担当していただいた。

■プロジェクトの第二の軸：ワークショップ

第二の軸はワークショップの開催で

ある。「第1回進化と文化とこころワークショップ」（2010年8月9日）では、竹澤正哲氏（上智大学）による「制度アプローチから考える文化の維持」と、鳥山理恵氏（トロント大学）による「文化伝達：模倣から社会学習まで」という2つの話題提供を中心に議論した。竹澤氏は、米国南部における「名誉の文化」の例を挙げつつ、文化が特定の社会生態学的条件における合理的な“制度”として説明できることを指摘した（ニスベットとコーエン、2009）。しかし文化は、環境が変化した後も“非合理的”に維持されることがある。こうした文化の“慣性”を理解するには、それが伝達されるプロセスを明らかにする必要がある。鳥山氏は、発達心理学の研究を紹介しつつ、文化伝達において、真似する者（子ども）が、対象者（親など）の行為の意図を理解した上で、まったく同じ行動を取る「真の模倣」が重要であることを指摘した。真の模倣によって文化的知識が累積されることが、チンパンジーなどの文化と、ヒトの文化を大きく隔てるものと考えられる。しかし「真の模倣」は「非合理的な文化の維持」という問題を解決するものではなく、今後の議論がまだ必要とされる。

「第2回進化と文化とこころワークショップ」（2011年3月24日）は、文化の歴史的变化パターンを検証する“文化系統学”を主テーマに、三中信宏氏（農業環境技術研究所／東京大学、生物統計学）による講演「文化系統学と系統樹思考」ならびに、2011年に出版予定の『文化系統学への招待』（中尾央・三中信宏編著、勁草書房）の草稿講読会を行った。現存するさまざまな文化の類似性を比較することで、どの文化とどの文化が歴史的に近接するか、文化の歴史の変遷／過去を再構築



第2回進化と文化とこころワークショップ

するのが文化系統学である。ワークショップでは、こうした手法が文化心理学によるアプローチとどのような親和性を持ち、さらにどのような研究へと発展する可能性があるのか、議論が行われた。

■プロジェクトの第三の軸：講演会の開催

第三の軸は、研究会・講演会の開催である。2010年9月6日には森島陽介氏（チューリヒ大学）を迎え、見知らぬ他者への利他性の個人差と脳活動の関係についての研究を紹介していただいた。11月9日には山田克宜氏（大阪大学）に、社会の平均所得が上昇しても人々の幸福感は必ずしも上昇しないというイースターリンのパラドクスについて、幸福感は他者との比較によって決まるとする立場からの研究を紹介していただいた。

■今後の展望

本研究プロジェクトは2010年度に正式スタートしたが、それ以前から平石と内田は「進化と文化とこころ」のコミュニケーションを図ってきた。今後も継続して互いの領域の最新の知見をぶつけ合う場を作ることで、「こころ」の多層的理解への道を探っていきたい。